

胃 sm 癌のリンパ節転移予測因子に関する臨床病理学的・ 免疫組織化学的研究

尾石 樹泰¹⁾ 岩下 明德²⁾ 八尾 恒良¹⁾
有馬 純孝³⁾ 松井 敏幸¹⁾ 淵上 忠彦⁴⁾

- 1) 福岡大学筑紫病院消化器科
- 2) 同病院病理部
- 3) 同病院外科
- 4) 松山赤十字病院消化器科

要旨：胃粘膜下層癌のリンパ節転移に関する因子として臨床病理学的事項と免疫組織化学的所見を検索した。対象は多発癌を除いたリンパ節転移陽性例92例と陰性例121例の計213例（そのうち高分化型腺癌はリンパ節転移陽性例50例、陰性例77例の計127例）であった。全 sm 癌と高分化型腺癌に限った症例を対象として、リンパ節転移陽性群と陰性群で同様に比較検討したところ、臨床病理学的事項では共に占居部位、最大径、深達度、垂直方向 sm 浸潤、リンパ管侵襲、静脈侵襲でリンパ節転移陰性群と陽性群の間で有意差がみられた。それらに加え、高分化型腺癌においては簇出（癌の発育先進部における癌細胞の遊離）にも両群間での有意差があった。免疫組織化学的検討成績は全 sm 癌では CD44 と Ki-67LI が、高分化型腺癌については CD44, MUC1, HGM および Ki-67LI にリンパ節転移陽性群に対して有意差がみられた。多変量解析の結果、全 sm 癌のリンパ節転移に関与する因子はリンパ管侵襲のみであったが、高分化型腺癌を対象にするとリンパ管侵襲と CD44 の 2 因子であった。高分化型腺癌におけるリンパ管侵襲および CD44 の検索は、リンパ節転移を予測しうる可能性があることが示唆された。

索引用語：胃 sm 癌，リンパ節転移，免疫染色